女王の涙

ロースト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
女王の涙

【Ｎコード】
Ｎ５０８８Ｖ

【作者名】
ロースト

【あらすじ】
ディディカは人と淫魔のハーフという忌み子だった。幽閉さえた塔から出ることも出来ず空を眺めるだけの生活。窓の外で焦がれるように見ていた少女の突然の別れにその平穏は崩れ去った。愛しく思ったはずのエレナが憎い。彼女に復讐するべくディディカは力を求める。

1．はじまりとおわりの記憶

女王の涙

1．

始まりと終わりの記憶

感じたのは熱い雫。そこからじわりと侵食するように広がる熱さ。火傷よりも熱い、麻痺した痛み。熱いと感じるのに体の節々が冷えていくような感覚。

例えようも無いおぞましさが全身を襲う。体を這いずるように伝う赤く熱い何か。その小さな感覚に体中が震えに走った。嫌らしいほど全身の感覚が鮮明で、現実感を持って訴えてくる。

世界と一体化したような感覚、世界のどこかで風が吹いた、世界のどこかで誰かが話しをしている……そんなすべての事象が体に刺激を与えてくる。

強烈な本流の中にちっぽけな意識が漂い、巻き込まれている。

俯瞰した意識は見ていた。

胸から突き出たナイフも、血が傷から滴って服を濡らし床に落ちていく様も、信じられないかのように目を見開いて胸元を押さえ苦しみに前かがみに崩れ落ちる己さえも、――すべての発端、全身を赤に染めた少女の歪んだ笑みを見ていた。

俯き加減なのか、視界が暗いのか。顔の下半分のみしか判別することの出来ない少女はゆっくりと真紅の唇を動かして紡ぐ。「――――死んでくれる？」

ゾッと背筋が震えるのと同時に目が覚めた。

1．1　彼女との幸せな残り時間

「また、あの夢か」

視界の端に朝日が射し込むのを見て青年は寝台から降り立つ。
シーツが一瞬体に巻き付くようになったが抵抗にもならないまま白い大腿をさらけ出した。細く長い足は世俗の苦など知らぬ無垢のようだったが、その性別を鑑みれば異常なほどだった。朝日を浴びた姿は綺麗すぎて人に畏怖を覚えさせる。魔の美しさ――淫魔の青年の美しさだった。
いや、実際には人と淫魔のハーフであるから、寿命が多少人よりも長くともその性別を越えた美しさを身に備えていようとも、その種族が人間側に属するということには変わりはない。魔王とはどんな魔物、魔族よりも知性高く気品に溢れ、そして魔に愛された存在の事を言う。魔の高み、魔術も魔力も至高。人格も素晴らしい。それが歴代の魔王。

今代の魔王はどうなのだろうか。ふと、彼は思ったが姿も噂も伺ったことはない。彼のもとに多く情報は集まるが、そのどれもが制限された範囲内でのもの。だが、と彼は思う。
魔に好かれる性質のかの人ならば、こんな自分を受け入れてくれるのではないか。人と魔族のハーフという存在。人にとっては“汚点”であるらしい。では魔の眷属であるならばどうだろうか。――美しいだけの存在は、けれど魔の側にも不要だろう。強さを競う世界で、彼は観賞用にもなりはしないに違いない。

だからこそ、青年はここに閉じこもる。幽閉という名のもたらす平和な閉じられた世界に一人。

「ディディカ。ディディカ、いるかしら？」
「いるよ、僕の愛しいエレナ」

「おはよう」
「おはよう」

それから、わけもなく二人で笑い会う。

「これが御伽噺ならばディディカは囚われのお姫様、私は助けに来たつもりがあなたに心を奪われてしまった騎士様だわ」

「立場が逆だよ。それにエレナよりも強い人に僕が勝てるはずないじゃないか」

「まぁ！失礼しちゃうわっ」

一通り、他愛ない話をして、いつもどおりに短い会話を楽しむ。

エレナと会ったのはたぶんそんな昔ではない。
刺激のない世界が色づいた瞬間の事はよく覚えている。ある日、“空の散歩”をしていたエレナがディディカの姿を見止めた。ディディカには代わり映えのない世界の、代わり映えのない行動。毎日、朝日が部屋に舞い込むと眼を覚まし、窓辺に歩み寄る。雨の日も晴

れの日も、曇りの時も嵐の日も無感動に見つめ続ける。

ディディカは朝にエレナと交わす会話が習慣となっただけで、それ以外は外へと眼を投げかける日々。最初は言葉を喋る事さえ久しぶりでひり付いた喉に言葉が痞えた。

「ねぇ、食事した？」

ううん、これから食べるよ。そうディディカが言うと嬉しげに大きく頷く。

「私、お料理したの！あなたに食べて欲しくてっ」

逸る気持ちを抑えきれないようにいうエレナに罪悪感が沸く。

「……うん、ありがとう。気持ちだけもらうよ」

エレナは料理上手とはいえないだろう。けれど、一生懸命さが伝わるお弁当だった。ディディカはそれを食べたいと思う。

けれど、そうすることはできない。エレナも分かっているはずだ。

僕らの間には、結界という名の鉄壁の壁がある。

「その結界を通り抜ける魔法を考えてきたの！だから大丈夫」

自信満々にエレナは可憐な唇から紡ぎだす呪文。

エレナが本気で言っているのだと感じ、ディディカは躊躇いつつも窓辺から奥へと入った。

ディディカの閉じ込められている城は魔法の城だ。魔術とは根本的に相性が悪い。魔術師の天敵が魔法使いである。魔法使いの天敵もまた魔術師なのであるが、それは火が水に勝つような問題だ。絶対的な理を無視してなお圧倒するような物量がなければその逆理は証明できない。

エレナは魔術師だ。ディディカは人間で、それでなくとも淫魔の属性で、魔術師の家系だ。どちらも、魔法使いではない。

魔法の結界は、崩されない。

「いっけぇえ！！」

エレナが気合の裂帛をするカタカタと音をさせるような動きをしてバスケットはしゅぽんっと空間に消えた。次に瞬けばそれはディディカの部屋の内側、窓辺の所に鎮座していた。

「……え」

予想も、しなかったことなのだ。

さぁ、食べて！と促されたバスケット。その蓋を開けたらば先ほどよりも更に歪んで混ざり合い出来不出来よりも食べ物かどうかを疑いたくなる様が繰り広げられていようと、魔法の壁にエレナの力が通ったという事に、驚き、頭が真白になってしまった。

「あ、駄目！圧力がかかってぐちゃぐちゃになっちゃったんだわっ」

慌てたようなエレナの声が静止をかけるのも気に掛からなかった。ただ、目の前のバスケットを、ディディカは見つめる。

それ以外の思考が働くわけが無い。それは一つの奇跡。
魔術師が魔法に打ち勝つという、この世界の法則を曲げた、奇跡。

やがて、反応の薄い僕を見て取ってエレナは尋ねた。
「……気になる？」
「気になる」

魔術の徒としての答えだ。
言葉がやけにあまく感じられて、釣られるようにエレナの顔を見上げた。

ふよふよと、空に浮くエレナ。シートのようなものに乗って来る時もあれば、今のように箒か棒のようなものに腰掛けている場合もある。風の属性魔術。
正直に言って、ディディカはエレナにそれほど才能というものを感じていなかった。現代の魔術師といえば国家資格者ばかりが多く、仕事もそれに値して国の防衛だったり要人警護、その叡智・才能を買われて魔道具造りや魔術の更なる発展のために研究者として尽くすか。
エレナのように些細な事で魔術を使ったり、生活面において利用するなどということは発想でさえ浮かばない。だからそれを尊敬する事は出来る。だが、人を圧倒する力はないし、度胸も努力も人並みでしかない。突出しているのは彼女自身で、彼女の力ではない。美しい容貌も人に好かれる性格も、彼女を好意的に見る面はあっても人に傅かれる器ではない。人を使うには“何か”が足りない。圧倒的な存在感のようなもの。

エレナはけれど、魔法を打ち破った。

「私ね、王の力を手に入れたのっ！」

そう言って、彼女は小悪魔的に微笑む。魅惑的な瞳が、唇が、紡ぐ甘美な言葉。

ディディカは先ほどから熱に浮かされたような気分を感じていた。高揚する心は現実を現実として受け止め切れていない。発熱する心が動悸する。

「――――王？」

王といってまず思い浮かぶのは自国の王。そして他国の王。でも人ではないのだと思い当たる。では魔術を統べるの王――魔王か。いや、そんなわけはない。

「精霊？」

口に出した答えを荒唐無稽だとは笑えなかった。エレナが満面の笑みを浮かべている。まるでそうだと頷かんばかりにディディカを見て微笑んでいた。

1．2　純粋の歪を知らなかった

「祠を探しに行ったの」
「でもね、壊れちゃって、王は怒ってたのよ。家が、城がないって。だから『私のところに来ればいいわ』ってそれでね、地の王が祝福をくれたの。今のも地の王の力を借りて……」
「まって。地の王？本当に？――いたの、そんな存在」
『おまえは我を疑うのか、愚か者め』
厳しい声が響く。
「あら、ディディカは驚いちゃっただけよ。許してあげて。本当に、私も信じられなかったの、まさか会えるなんて、夢みたいに感じちゃった」
『……エレナがそこまでいうのならば聞こう。我もこの程度の輩に怒るほど器が小さいわけではない』
「あなたが、地の王――空間を司る精霊王？」
『そうとも。囚われ人よ』
精霊は魔法の領域だし、法式が解けるのも納得がいく。けれども、ならばなぜエレナが呪を唱える必要があっただろうか。どんな空間をも越えて蔓延る王の力。だが、今のは……それが信じられるほどの力量とは思えなかった。

――力量を超えた力は破滅をもたらす。

その文句は古来から言い続けられ、証明され続けた言葉だ。ふと思い至った危惧にディディカの眉が寄った。
「……ねぇ。私、旅に出る事になったの」
ポツリ、と言葉を零すエレナ。はっとした思いに突かれた。

旅に出る。それはディディカとの別れの時だ。

彼はこの城からは出られない。魔法の城は彼を閉じ込め続ける。きっといつまでも。

逃れる術は、精霊王にさえないのだろう。――強力な、古の魔法の城。魔術と魔法とを、人の力でさえも拒絶した空間。きっと魔王でさえもここは手を出しにくい。

「――うん。そうだと、思ってたよ。選ばれたんだね？」

でも、いつかはそんな日が来るのだと。そう、思っていた。

ディディカは実はエレナというこの少女の事をあまり知らない。朝に会って、会話して、食事の時間を楽しんで、それからまた少し会話をする。

それでも二人の絆は確かなものだし、それは友情から男女の思いにまで届くことは決して困難なことではなかった。

お互い、互いを知らない間のことなんてわからなくていい、必要な事は目の前に今ある時間なのだとおもっていた。何が好きで、何が嫌いか。どうやって日々を過ごすのか、どんな面白いことがあったか。何が得意で、何が苦手か。“エレナ”という人物を知るためにはそれだけでいい。

過去も生い立ちも、どこの国に生れたのか、兄弟。そんなことは知らなくても構わなかった。否、自分が尋ねられたら答える言葉のないその疑問を彼女に対して投げかけることは意識的に避けていたのだと、今なら分かる。

ディディカが知るエレナはほんの一部で、ほんの小さな部分かもしれない。それでも、知っている事はある。

彼女はここ一帯の中では一番の実力者らしい。最近では精霊王の

一人、地の王の祝福も得た。選ばれるのは当然なのだ、国の代表者として。

「ええ。そうなのよ」

魔族を相手にし、その王を討つ。そのための部隊、勇者部隊。その人員を決める為に開かれる、世界一大会。それに国の代表として、彼女は出るのだ。

「今夜、また会える？渡したいものがあるの」
月明かりの下で、と約束をして彼女は去った。明るい日差しが彼女の夕陽の朝焼けのような髪色を輝かす。まるで、太陽のようだと思った。その微笑みは誰かの心を照らすためにあるかのような明るい、元気色。闇の中を生きるものには焦がれる光。
（触れられない事がこんなにも辛いなんて、きっとエレナが居なければ僕は知ることがなかっただろう）

1．3　夜の月雫

暗い夜の中を泳ぐ、深海魚。それは遥か頭上の色を知らずにいるからこそ、生きられる。光が届く場所に生きたいと望んでも、光の中ではその歪な姿が浮き彫りにされてしまう。決して受け入れることのできない環境――光の中に住むエレナはどこまでも届くことの出来ない存在だ。

（そんなことは初めから知っていた）

遠い遠い存在。

それでも、その笑顔に救われた。

（もう、自分を呼ぶ声はない）

エレナにはエレナの世界がある。

陽だまりの中にいる彼女がとても好きだ。

暗く狭い陰鬱な城が自分の世界だ。――二人は決して相容れることはない。

「エレナ……」

切ない声は青く透き通るような地平に消える。ディディカは苦しくなって胸を押さえたが、奥にある傷は癒えることない。エレナの笑顔がディディカの傷を癒す、唯一つの魔法なのだから。

霞がかった雲が月夜に薄く膜を延ばす頃。
銀色の月明かりが湖畔に反射するその美しさは言葉に例えようもない。けれど、彼を見た人ならばその水面を彼と例える。銀の髪を背に垂らし、銀の縁取りある大きな瞳は影を持って伏せがちにしている。どこか愁いを秘めた表情を持つ、人と魔族の間の子――ディディカ。
青年は月夜の差し込む窓辺にほっそりとしたシルエットを作り出し、佇む。石造りの無骨な城はけれど、それだけで幻想的な場所となっていた。
「ディディカ――！！おまたせっ」
ぼんやりと黒と紫、その隙間を彷徨っていた彼の視線が声の方へと流れた。
夜の中にあっても光を失わないような朝焼け色の髪を持ち合わせた可愛らしい少女が夜色のカーペットの上を走ってくる。
風の魔術か地の王の力を借りた魔法かはディディカには判別がつかない。ディディカには目の前で起こることすべてが新しい発見であり、初めての経験だ。
ただ、驚くというのなら、彼女のその様相。旅装姿である、という点か。
（今夜のうちに旅立つのか……）
半ば諦めにも近い気持ちで悟る。
大会までに日数はある。けれど、当然、実力をつけるためにも、魔王を倒すために魔物・魔族を討つという目的で旅して回るのだろう。大会までの間に、村を、街を、諸国を巡り歩く旅。

「エレナ……僕は――」
言いかけて、何が言いたかったのか分からないまま言葉を止めた。
ただエレナの瞳を見つめることしかできない。

「大丈夫よ。心配しないで、私は強いもの！」
いつも通りの元気な声、輝く瞳。これから先のことに思いを馳せているのだろうか、楽しげな表情は軽々しい。手振り身振りで大丈夫だと何度も言うエレナにどんどんと気分が落ちていくようだった。
（恐ろしい）
何が、とは思わなかった。
その前に彼女が察する。なおも強く、勇気付けるようにディディカへと言葉を向けてくる。せっかくの機会なのに、とエレナまでもが気落ちしそうだった時、ディディカはその手に持つものに眼を留めた。

「それ――」
渡したいものがある、と言っていたからそれなのだろう。今までにエレナがつけているところも見たことがないそれは、けれど上質で頑丈そうにも思える。それでいて細工は華美ではない美しさ。――簪だ。
エレナは一度ディディカに背を向けると、自らの髪を纏めて持ち、クルリと捻って見せるとそれを髪に挿し込む仕草を見せた。
（僕に、付けろって言うことかな？）
目前で繰り広げられたことに対してディディカがどこかノンビリと思考を繰り返し、その挙動を見守る。案の定、正面を向いたエレナはやり方を覚えたか聞いてきた。素直に頷いて返せば、朝あったようにエレナは簪をバスケットと同じく目の前から消して、ディディカの前へと出現させる。何もない空間から姿を現してポトッと、ディディカのもとに落ちた。
「これ。私たちの絆の証よ、受け取って」

掌に乗る重さが重厚だった。エレナから自分の手へと渡されるのを、じっとディディカは見た。

「私は――帰ってくるわ。ここに。あなたのもとへ」

1．4　胸に突き刺さる誓い

力強く、壮絶な笑みさえ浮かべて放たれた言葉はディディカの中に突き刺さった。

名残惜しいと瞳が訴えていると思ったのだろう、彼女はそんな言葉を口にした。なんの慰めにもならない、ただの口約束だ。

けれど、ディディカもまた紡ぐ。

「エレナ……最後じゃないよね」

確信を持って。

力強く、燃えるような熱さを魔族特有の黒色の瞳に乗せて、ディディカは放った。

それに、エレナもまた、頷く。一度、壊れてしまえば同じものなどこの世には存在しない事を彼らは本能で知っていた。だからこそ、この絆は今日で壊れるものだと、互いに知っている。それでも紡ぐ言葉は偽りではなく、新たな先への誓い。

ディディカは背を見送った。

その時の感情は言い表せない。

激情。荒れ狂う闇。振り切る心の針。尺度など測れない、激しい感情。揺さぶられる。

暗い闇から這い上がるずっしりとじめじめした薄ら寒いもの。奥底を這いずりもがく想い。価値観が変わるかと思うほど、ただ烈しく、激しく、はげしく。

「エレナ――」
感情を幾つも束ねて複雑に絡み合わせた声音が夜色にかき消える。
想いが重なりあい、混ざり合い、ディディカはその名を呼ぶ。決して届きはない、その名。
最後の記憶にまで修正が施された、腕を伸ばした先のその人物の名を呼ぶ代わりに、現在の名を紡ぐ。――歓喜と怒りと悲しみと。

（誓うよ。再び会う事を、この道の先で――待っていて）

折り曲げた想いは、簪によって呼び戻された呼応する想い。エレナとディディカの絆はこうもあっさりと焼き切れた。夢の中の少女二人の呪詛により、――二人は意図も簡単に敵対した。

（……君を殺してあげる）

幽鬼のように、ディディカから魔力が迸った。

1．5　風に巻き上がるもの

だが、ディディカの魔力は作り上げた端から端へと流れてゆく。円柱型の塔の丸く切り抜いた部分。魔力のすべてはそこに集められる。

抜き取られる魔力に従うようにしてディディカは扉をすり抜けた。

鉄柵に擦りつけた指先には冷たさと熱さが、奈落の底を覗きこむのと同じほどに底なしの穴に落ちてゆく。

風が前髪をふわりと巻き上げる。

（竜巻……）

魔力の渦が深い闇の底から立ち上ってくる。

それはディディカの魔力を片端から吸い上げ巻き込み、大きくうねり出す。

轟、轟……と耳元で唸るその低い声に昂揚を感じた。

風の終わりとはこんな場所だろうかと考えながらディディカは自らの魔力を練り上げた。

長らくこんな場所にいると、すべてが諦めて思えてくる。幼い頃から、成長するに従ってディディカの魔力は保持する量を増やしてきた。

いつか、この塔の限界値を超えるものになれば、この閉じた世界から解き放たれる時も来るだろうと。

そんな日はついに来なかった。

けれど、本当にそうだっただろうか。
(僕は、今まで本当にここから出たいと思っていただろうか)

わからないままに思う。

今以上に強く願ったことはない。自分の可能性を、自分の未来を
――この世界から抜け出す事を。

「僕はここを出る」
そしてもう一度、君に微笑もう。
(君の名を呼んで、愛しいと囁いて)
そして残酷に告げよう、“君を殺したい”と。

空気が疼いた。
渦が形を留めなくなる。

1．6　灼熱に揺らぐ

簪が掌を突き刺す。肉を食い破る、熱さ。痺れるような、酔うような、強い吸水感。世界と一体化する感覚は以前にも味わっている。その中で、ディディカという個体の意識はどれだけちっぽけなものか。その個を保つにはどれだけの精神が必要なのか。

熱い熱い熱い熱い。

そればかりが頭の中に木霊する。

それだけで思考が埋め尽くされ、浸食され、何も考えられなくなっていく。

（――意識がもってかれそうだ）

いや、そもそもの根源である個が失われようとしている。

ディディカという存在はたった十七年前に生まれたばかりだ。世界と言う強大な存在に対してそれはとてもとても小さな瞬きよりも短い時間。

それでも、ディディカは意識を繋ぎとめ、願い続ける。

『人と魔族の子が何の用かな？』

優しい、けれど深い地の底の声音が聞こえた。

けれど、願う者はそれではない。更に願い続ける。胸の奥にある灼熱を、そしてその更に奥底で燻ぶる冷たい温度を。

『――無視、か。よくも厚顔無恥に』

声が邪魔する。聴覚を遮断する。

感覚は鋭敏にしたままで、それはとても繊細に、ただひたすら熱だけを感じ取る。

『……』

沈黙が脳に響く。やはり、訴えかけてくるのは直接の精神だ。感覚受容器官など、彼らにとっては何の意味もない、ただの器に過ぎないからか。

やがて、それは炎を揺らめかせた。

『――面白そうな事をやっているな』

気まぐれにひかれた、黒くて赤くて蒼い熱。短気に、緩やかに、大きく、尊大にその声はディディカの脳に響き渡る。目を、開けた。

「火の、魔神」

火属性を与える守護神。魔法も魔術も関係ない、火そのものの正体。

眩い光は紅い光点か、それとも輝く肢体なのかは分からない。視界なんてあってないようなその世界は精神世界よりも現実世界に依拠しているはずなのに、曖昧に歪む線のみの空間。

『体が無くなるぞ、半分の子』

光点は声を発した。朧気にそれが形のようなものを得て来る。
ディディカの思考を探ったのか、世界の歴史に辿ったのか、その変化は著しく目まぐるしかった。

未知から既存へ、無機物から有機物、無生物から植物、動物へ。
より知能ある存在へ、至高へと近づき――その進化は人と言う形を取って終えた。

見つめる視線の先にあるのはとても言葉を話すとは思えないほど精巧なヒトガタ。
人形か機械のような精密細工の美しい存在。熱く燃えるような髪、憎悪と闇の混在したような黒色の瞳。高い背は力強く、その身は猛々しさを持ちつつ、マントを羽織り細身に見せる。
例えようもない、神々しさ。眩さに圧倒されそうだった。

1．7　こびりついた肉片

痛覚の消えうせた利き手を見やる。皮膚は焼け剥け、筋肉が露出している。握った簪から指を剥がそうとするが、硬直したように力が入らなかった。

一方の手で指を剥がそうと動かすが、べったりとした血が、肉が簪にへばりついて取れない。感覚の消えうせた、今後一切使い物になりそうもない利き手はけれどぴりっとした痛みを訴える。傷口が焼けることで終えたはずの赤色の雫が再び流れ始める。

白く、輝くようなものが見えたのは肉の先に厳重に隠されているはずの、骨か。炭化した指があった。五指とは言えなくなってしまった己の手に、――けれど感慨を覚えるでもなかった。

「契約を……」

声だけの存在を見据える。

見えるはずだ。ディディカには確信があった。魔族の血が流れるこの身体は、その瞳でその存在を見据える事が出来る。

『名を呼ぶがいい、愚かなる者』

神の力を得んと欲する、身の程知らず。

呼べるものならば読んでみろ、と示す。

古の記憶にも朧ながらその姿は映し出されていた。しかし、その名は秘するもの。決して呼ぶことのできない、形のない称号。声ではない。音ではない。歌でもない。

それはナニカだ。

理解することは不可能。神であってこそ、それは知りえる。神が

分け与えた叡智あってこそ知ることのできる言語。失われた存在、世界の秘するものの一つ。

だが、

『――――』

ディディカは恐れる事もなく、その名を口にした。

瞬間襲う吐き気、頭痛、痛み。

一瞬で意識が刈り取られそうになる程の不快感。

身体が悲鳴をあげていた。精神が壊れそうだった。

それでも、ディディカは口を動かして、告げた。

「契約を、火の魔神」

もごもごと、意識の混濁した状態での言葉は余り鮮明ではなかった。

しかし、それは人知を超えた存在。音でなく、言葉でなく、心でそれを理解する。

生物というのもおこがましい、埒外の存在。

『――いいだろう』

了承の、声が深く響く。

その炎の灯った指先に似たものが喉元を軽く触れて、――灼熱が襲った。

指が喉に触れた。
炎の化身の一部ながら触れたそこには氷塊を飲み込ませたような冷たさが降りて、次に灼熱が襲う。あまりにも冷たい感触に麻痺したはずの感覚が喉に溶け出す。
体中を焼き尽くさんばかりの熱量が流れ込む。熔岩が口を開いたかのように駆け巡る。
熱い炎の魔力は新しい所有者の全てを蹂躙していく。

（熱い）
滲む汗は脂汗か、発汗か。

拭い去りたい不快感をけれど取り除く術をどこにもない。倦怠感の増してゆく身体で意識を取りこぼさないようにしているので精一杯だ。

「ごほっ」
咳だけではなかった。口から吐き出される、赤い物体。
身体をクの字に曲げる。

1．8　揺れ落ちた世界の先

飲み込む空気が熱く、燃えていた。火の塊に触れるよりも熱い。吸い込む事などできもしない、血臭。自らの体から這い出たそれを前に、尚もディディカはせき込む、いや吐き出す。

（頭が割れそうだ）

ひどく熱い。いや、重い。

圧迫感が堪らない。締め付けられたようで、ぼんやりして、思考など一切できない。それは今まで経験した何よりも辛いことだった。

（……気持ち悪い）

世界が回っていた。感覚がひどく鋭敏になっている一方でひどく鈍重になっている自分がいた。焼け焦げて炭化した指がある。それは誰かが見れば怒るだろう。無茶をした、といっては泣いてくれるだろう。月の化身かと疑うほど美しい青年の容姿から、芸術品が生命の輝きを得たかのような青年が指を欠損した事を誰かは嘆くだろう。

（けれど、僕にはもう――）

その“誰か”は失われてしまった。

“誰か”は平穏が取り上げられると同時に失われたのだ。そうして、今、ディディカは独りここにいる。自らの体を喪っても、何も思うことなく。精密機械で作られたかのように完璧な顔立ちを何一つ歪めることなく、その存在を見つめる。

『名を。呼ぶ事が出来るとはな』

感心したような声に、苦笑した。
それはディディカが名を呼び見つめていた“火”の神とは違う。
その隣に居る、先に顕現した“地”の神。

「……随分と吹っ掛けたものだな、神も」
まさか名を呼ぶだけでこれほどの負荷がかかるとは思いもしなかった。
軽口を叩く。けれど、これもまた声にはならなかったように思う。
フッと笑った瞬間の息苦しさに喉は音を奏でる事はなかった。

『どうやって知りえた？』

問いかけには先ほど以上の興味が見えた。

それにディディカは意味深に謎を残す答えをする。
「以前、聞いた事がある」

「あなたの口からね……告げられたのは、僕では、なかったけれど」
聞いたのはディディカではない。レギナだ。
告げられたのは……名前を思い出せないあの子。

（なぜエレナが精霊王を呼び、神を呼ばなかったのか……分かった気がする）

神を呼ぶ代償は途轍もなく大きい。少女の身体には多大な負担だ。
だから彼女は“手に入れやすい”精霊王を従えたのだろう。

（でも、甘い）
背後に油断がある。僕という存在を見逃した代償。
（君がいつか神を呼んだとして、そこにいるのは僕と契約を交わした神だ）

低い笑いが出る。
ディディカが今までにしたこともない、凶悪な笑顔。凄絶なるその美貌に、その笑みを貼り付けて、一歩踏み出した。
「っ」

世界が揺れた。

咄嗟に伸ばした腕が何にも触れることなく、身体はバランスを崩した。
空に放り出される。
『――神をこんな些細な事で使うとは、なんとも贅沢だな』

温かな熱が背から伝わってくる。
ディディカは熱のないかのような美しい、けれど冷たい色の眼差しを炎の存在に向けた。
「……長年なかった契約主に同情でも覚えたか」
『今得たばかりの相手を姿も消していないうちから死なせるほど忙

しくもないからな』
竜巻の消えうせた空洞に落ちたディディカを助けた手を離しながら神は笑む。ディディカも合わせて酷薄に笑った。
降りたくても降りることのできなかった、地面。闇の底であり、光への入り口。
（っとと……）
足元の感覚があやふやだ。いや、全身の感覚が酷く遠く、そして酷く重ったらしい。
今にも崩れ落ちそうな膝に力を入れて一歩一歩を慎重に動かす。
そして――ただの石の塔となったその扉を押し開いた。

ギィイ――
断末魔よりも尚か細い声が静かに闇の中に木霊した。

2.　過去と現在を司るもの

「さすらいの一族なのさ」
　ゆさゆさと、温かな背の変わらない振動にまどろみながら聞いたそれは、祖母の優しく厳しい言葉だった。
「いいかい、よぉく覚えておくんだよ。お前は旅人なんだ。一つ所に長く留まるのは災いを呼ぶ。性質は変わることがないから厄介なのさ。逆らえばあらがうだけの不幸が襲いかかってくる。……私の言うことが今はあまりわからないだろうさ。だが、それでいい。わかるようになった時には手遅れさ。だから、今から言うことをよく覚えておきなさい。――お前が幸せにいるためには、普通の人生を、幸福を生きるためには守らなければならないといけないよ」

（おばあちゃん。私は今、後悔をしています）

（大切なおばあちゃんの言葉を忘れていたわけじゃないんです。ただ私が馬鹿だったのです）
　今、レギナは大きな城のような屋敷を目の前に猛烈に反省を繰り返していた。背後には広大な緑の土地。それとここまでレギナをつれて来た美しく可憐な細工を施した馬車。隣にいるのは孤児時代からの親友という奴。少し前にいてこちらを振り返るのはこの城の主の親戚筋であり――××の従兄妹であるらしいと発覚した少女。

「ほら、行きますわよ」

　お上品な口調に少しの高飛車が混じった態度で促されてレギナは横においていた大きな旅行鞄を手に抱えると美しい髪をなびかせ我が物顔で入っていく少女の背を追った。腕にずしりと重い荷物は、

けれどそれだけがレギナの生きていたすべてだと思うと、この城のような屋敷の前では頼りなく思えてくる。

三つの約束事と二つの注意を改めて胸に刻み込む。

（両親のこともおばあちゃんのことも私のことも知ろうとしない）
「目の前に見たことだけを真実となさい」
（身を着飾ったり目立つようなことはしてはいけない）
「お前は注目される器は持ち得ないのだからね、耐えられないだろうよ」
（今以上を求めてはいけない）
「人には分というものがあるんだからね、与えられたものを素直に認めるんだ。自尊心を持つのはいいが、誇りだけを抱えていては意味がない」

懐かしさが胸を襲う前に手にした簪を取り付ける。ふわりと漂った、一瞬だけの香り。それは遠い、まだ見ぬ故郷を思わせる。

「――お前にはお前の幸せがある。人を羨ましんだりして己を不幸と思うとろくなことにならない。何もなく生きていることが幸せだよ。平凡で代わり映えのない日々に見失ってはいけない、一番大事なものだ。……簪をもっているかい」
優しい声が促すのに幼い自分は何と答えただろうか。小さな掌には大仰な簪を握り締めた感触だけが確かな記憶だ。祖母の背は温かく、大きく感じたけれども、やはり老婆の細々としたものだった。そのことに気づいたのはもっと大きくなってから。
「うん、いい子だ。決して手放してはいけないからね、それはお前を幸せに導く。けれど、忘れてはいけないからね。それは両刃の剣さ、お前は今以上を望んではいけないよ」

墓さえも作る事の出来ない、旅人の宿命。――火葬にした後は灰を撒き、風に乗せる。そうして、再び旅立たせるのだ。永遠に旅をし続ける。死しても尚、魂となってさえ。

「じゃないと、自ら災いを招くことになるからね。忘れてはいけないよ……」

三つは約束、二つは注意。そう、幼い心に刻み込んだ。

細い首筋が心細かった。いつかはなくなる体温を惜しんだ。

幼心にも既に分かっていた、別れの時。だからこそ、離さない様にとぎゅっと縋りついた背中。握った柔らかい感触。

「レギナー？どうしたの」

覗きこんだ大きな瞳に一度大きく瞬いた。

「なにか、心配事？」

ううん、とレギナは頸を振った。それだけでなく、笑顔まで見せた。

心配をかけたくない。ただ、夢想しただけなのだ。懐かしい記憶、消えない温もり。求めた未来。……だから、レギナは今を見つめる。

朝焼け色の髪をした、同い年の子。彼女に手を伸ばした。大好きな親友の名前を呼ぼうと、その手を――

2．1　色とりどりの夢の残骸

「ああ、夢――」

伸ばした手の先、そこには親友であった少女の姿があった。

ディディカは身を起こすと、その素肌が曝されることも恐れずにベッドから立ち上がる。何一つ身につけていない、輝くような体が朝日の中に惜しげもなく晒された。そこに誰かが居たならば当惑するだろうか、その神々しさに。恥ずかしさを感じ入ることなどないような完璧な姿に、人々は神を見る。本人もそれに頓着する様子はなかった。

白い体がドレッサーの前に立つ。――色とりどりの衣装。ドレスにタキシード、男性ものに女性もの。派手派手しい色合いのものもあれば質素な素材のものもある。それはすべてディディカのものだ。

過剰なまでに揃えられた品々は彼が人間でありながら淫魔族であるという特質から来るもの。所謂、男性体と女性体を恣意的に変化させることの出来る特性。

（とはいえ、それも成人するまでの僅かな期間だけれど）

自我をもって魔術を行使できる年頃から成人までの間の期間。ディディカの場合は魔術の行使が魔法によって押さえつけられていたためにその影響は通常の成員年齢に達しても雌雄の別を可能とさせるだろうと予測させるが、今までに例はなく、どうともいえない。

「壮大な城に豪勢な扉。豪奢なドレス。……どれもが縁遠かったはずなのに、今ではこんなにも近くにある」

ディディカは夢の中ではただ一人の無力な少女だった。

しかし、ここは異世界である。そしてディディカもまた、レギナという少女ではなく、人と魔族の間に生れた子。淫魔という特性と

魔術の徒としての血。そして、人間で言うところの貴族階級がある。ディディカ・クロック伯爵、それが今のディディカだ。

ちょうどよいタイミングのノック音に了承の意を出して扉が開くのを見守る。城の主だ。

「おーディディカ起きたか、ってでぇえええ――！？」

「あ、おはよーリオード」

暢気に朝の挨拶を交わすディディカだが、己の友人リオードはなにやら忙しそうだ。おかしい反応、もとい叫んでもと来た道を戻ろうとする。不思議に呼び止めようとドレッサーの前から踏み出すがその前に部屋の扉は大きな音を立てて閉まった。

扉の向こうにいるはずのリオードにその行動の疑問を投げようとして、ぴたりと止まる。自らの視界に入った、その素肌。（――ああ、裸だったか）

それも、女性体の方だ。

自らの体をじっくりと見降ろし、その体つきが丸みを帯びて女性らしい事を知る。二つの乳房は豊かに、果物の瑞々しさを思わせ、その括れた腰からのラインは美しく爪先まで至る。起きたばかりで下りたままの髪が白い肌に恥じらいを持たせるように纏いついていた。

「弱いな……僕は」

ドレッサーに手を伸ばして服を取り出す。女性用のドレスが多い中、自らの男性用の礼服を取り出して身につけ始める。その時には既に、青年のものへと変わっていた。そして自らの髪へと手をやり、サイドテーブルに置いてある簪を手に取った。黒く艶のある、女物の簪。

レギナが祖母から譲り受けた髪留め。レギナが炎の死の中、名前も思い出せない友人に奪われた宝物。エレナがディディカに預けた約束の証。――ディディカをレギナに結び付けた簪。

（きっかけなんて、なくてもきっと）

きっかけは簪。

エレナがディディカに約束の証として与えた女物の簪。それだけだった。

けれど、ディディカは簪を見た瞬間、手に触れた瞬間から変わってしまった。ディディカは己の中に眠るレギナの存在をはっきりと自覚した。

だからレギナに引きずられたのだ。

女性と呼ぶにも幼かった、少女。その夢を見たせいで身体が勝手に勘違いしたのだ。

ディディカが女性であることは隙を見せることになる。万が一の時、女性であるというのは実に非力だ。男性と対峙するならば覆せない差となってしまう。

だからいつもディディカは恣意的に男性体でいようとする。

それにも関わらず昔を思い出せばそれに流れてしまうのだから無意識とはなかなかに律せない困難らしい。

思わず苦笑してしまうのは、その弱みを理解しながらこの場所では遠慮なく夢を見てしまうということで。

（リオードに気を、許し過ぎてる）

素直な無意識が根底にある。

「一番、弱いところを見られたから、か」

信頼があるのだ、絶対な。

半年前の運命の日、焼け落ちた塔。空が赤く燃える景色でいくつもの影が暗躍していた。……

2．2　陽炎に揺れる塔を背にする

「何なんだ、あのバカは！！」
たった今出てきた部屋の扉を背にして怒鳴るようにはき捨てた。
（警戒心がなさ過ぎる）
いっつも俺だけが悩まされなきゃならん。徐々にいらついてきたのはそればかりではない。なぜ自分がこうまで振り回されなければならないのか、自分の心にも腹が立つ。
わかっているのだ。
報われない、そうわかっているのに心はあの魔性に引き寄せられる。
美しい容姿だけならば問題はなかった。あれほどの美貌を求めるほどリオードは無謀ではない。立場上、美しいものには見慣れている。並ぶものがない美しさに眼は止まるが、それだけだ。
避けがたい、その瞳。
一途な心の強さがリオードを惹きつけてやまない。脆く感じさせて、美しく儚く認識させて目が離せなくなる。
ディディカは光なのだ。圧倒的闇に包まれた核だけが輝き続けている。誰にも見られない場所で、静かに輝くのを、けれどリオードだけが知ってしまった。
（支える以外、何ができよう）
半年前の赤い夜にディディカはリオードの前に現れた。

白けるはずの空が暁に染め上げられていた。
それは突然の事態だった。夜中の鐘が人々の心を不安にさせる。誰もが不審に思った西の森での火事――この地の領主であって、森の守人であるリオードはこの事態に心を熱くさせられていた。
東領とリオードの統治する西領の境にある森。その奥深くに聳える高い石造りの塔。誰も辿りつけない森の中央に起立する、魔法の古城。森が全焼するようなことになる前に手を打たなければならない。
年若いながらも領主であるリオードはが聞かされたのは石塔が焼けるよりも遥かに高い熱で溶かされていたということ。
その方法についてなど疑問はありつつも、下手人の捜索隊を出して一時的にも事態は収集へと向かっていた。だが――

「まて」
森の奥を見据えて警戒を表した従者に、リオードは何故か制止をかけていた。目を凝らしたところで見えるはずもない、暗闇の奥の第三の存在。濃密な黒が粘り張り付く感覚を耐えて見据えた。不吉な予感が胸に過ぎるのに、その時間を焦がれるような思いがする。
そして、――嫌な匂いがリオードの鼻についた。肉の焼け焦げた臭い。

じゅぅ……

焦げる音、草が、地面が焼けてその姿は出てくる。

服は所々焦げて解れ、その素肌が晒されていた。
月が耀き夜の明け始めた時間帯に松明は必要なかった。月と同じ銀色の長い髪を背に輝かせて、白い肌の美しい身体に服を纏わりつかせて、人とは思えないほど端正な顔立ちに美しい闇色の瞳を輝かせ、――青年は歩いてきた。

炎を背に負うようだった。
東の空が赤かった。銀の髪は黄金の縁取りを浴びて嬉々と自らを誇る。炙られ、幽鬼のように身を揺らめかせる塔を背に、青年は立っていた。
（――これ、は……なんだ？）

その生物をなんと言って呼べばいいのか分からなかった。
一歩一歩、踏みしめるように進む足取り。いつの間にか青年はリオードの前にいた。リオードの従者も、青年に見惚れて制止する暇がなかった。交錯したその瞳には困惑した表情を浮かべるリオードが映っていた。

「おまえは、なんだ」

いつのまにか口が動く。勝手に疑問が飛び出していた。青年はリオードに微笑みかけると、瞳をゆっくりと閉じる。そして、
「っつ！！」

「ッリオード様！」

リオードの方へと倒れこむ身体を咄嗟に抱きこんだ。細い身体は燃えているかのように熱く、――いや、血が滾っているのだ。
（オーバーフローか……！！）

2．3　囚われたもの、眼差し

魔術耐性の低いものが陥りやすい、魔術行使による付加。魔術は供物を捧げ、魔力を元に行使される計算式上の“答え”である。答えを導き出すのに使用される方程式はそれぞれだし、供物は魔力によく計算式で間に合わなかった部分を――余分の加減でしかない。そして魔力とは流れだ。眼に見えない流れ、無色の糸。人を構成する要素であり、決して解く事の出来ない人体の不思議の一つ。ただ分かるのは血という媒介が一番魔力を伝達しやすいという事だけ。

だから魔術師は血を、古の血統を重んずる。血を濃くする為に行われた忌まわしい行為は貴族の中では暗黙の了解だ。そうして育て上げられた忌まわしくも尊い血というのは須らく貴族だ。力を持たないものこそが平民、身分なし。

それでも、というべきかだからこそというべきか。魔術に耐性のないものは大抵、貴族の中で生まれる。過剰摂取による一種のアレルギー。魔術師のなかでは無能、貴族の中でも冷たい視線に晒される。だからといって、その体質がなくなるわけでもない。人はその環境にいれば必ず、“無茶”をする。

オーバーフロー。それはその無茶による病状だ。その身に流れる血が身体を蝕む。魔力を感化しすぎた血は体内で熱く、沸騰するようになって、魔力を周囲に垂れ流す。魔術師が己の実力も考えずに魔力の行使をし続け、自らの血管を疲弊させた時にも同じ症状が出るが、その場合は身体がだるくなる、熱っぽく感じられるなど大概が軽い症状だ。そして、魔術師の忌み児との区別で力化（りょくか）症状と呼ぶ。

「くそっ……下がれよ、熱！」

対処は限られている。魔力に対する耐性を付けさせ自己回復に任せるか、加熱した血管を冷やすか。しかし、どれもが現実的ではな

い。実際問題として、オーバーフローになったものは高い可能性で死ぬ。
まさか、拾った途端に死なれるわけにはいかない。領主として、領民かもしれない者をみすみす見捨てる事は出来ない。そもそも（まだ事情もなにも聞いてない――！）
あの日、あの時間帯にあの場所にいたこと。それはあの事件にも少なからず関係しているといえるだろう。
（いや、そんなことよりも俺は――）
この美しい青年を、そのまま一人にすることなど出来ないのだ。
見も知らぬ青年を自室に連れ込んで自ら看病をし、交代すらも断るほど。会った瞬間から、たぶん魅了されてしまっているのだ。ほおっておけないと心が騒ぐ。
「――気にする、ことない」
聞き辛い声がリオードの思考を遮った。
見れば、青年の腕が上がっている。頭の上に乗せられた溶けかけた氷塊を摘み上げ、脇にどけて。その美しい顔に黒曜石の瞳を見開いて、夜の魔物を思わせる青年は身を起こした。
とても、動けないはずだ。
熱で節々は軋み、肌は焼けるように熱く火照り、身体の芯から焼け焦げるような熱さを感じているはずだ。喉は灼熱、空気が触れるだけで全身に痛みが走る。
それは意識を取り戻した瞬間から泣き叫んでもよいぐらいの苦痛。

外側から与えられる痛みは紛らわす事が出来るが、内側からのそれには例えようもなく、堪えようもなく――

「このぐらい、平気だよ……。僕は――魔、族だから」

「――――ッ！？」

だから放っておいて、と熱い吐息のまま紡ぐ青年に、リオードは絶句した。

「……うわっ！」

いきなり後頭部に痛みを感じてうずくまる。

「あれ？」

そんなリオードの声を聞いたのか、今度は遠慮がちに扉を開く。半分だけ顔を出して伺うディディカにリオードはちょびっと滲んだ涙目で恨めしく見上げた。だが、そこに反省の色はない。それどこ

ろかリオードに睨み返すだけの元気があると見るや否や扉を開け放った。

「何やってたの、リオードは？」

しゃがみこんだ体勢から扉の緊急避難でひっくり返るように転がったリオードにディディカはニヤニヤと、真底意地悪い表情を浮かべて尋ねる。

「別に……」

そっけなく言い返す。気恥ずかしい。

回顧など本人を前に言えるわけがなかった。

父・ザハルト伯爵から領地を預けられたばかりのリオードは今にして思えば笑いたくなる程後手後手、もくろみ違いも甚だ多かった。名ばかりが先行して歩き回り、周囲の期待にストレス過多で寝込んだり、と若さだけでやってられない責務に押し潰さる寸前。そんな頃をディディカ見られている。いや、駄目駄目なところ以外知らないだろう。余裕を得た今は爵位を得てから時の経つリオードよりもディディカの方が忙しい。

「思い出し笑いはスケベって言うよね」

タイムリーすぎる話題にギョッとして顔を見た。

ディディカは髪を簪で纏め上げているが長い髪は黒いそれと正反対に銀色を晒して背に垂れていた。首元からきっちりと絞められた白いシャツ、その上に重ねられたベスト。胸元は男性特有の平らさ

を持ち、体形もリオードや同じ年頃の男性と比べると華奢だが女性とは比べるべくもない。完璧な男性姿だ。それでも、その顔立ちの綺麗さと締められたはずのボタンの隙間から匂い立つ様な色気とが相まって中性的、思い余って危うい道へと逸れる同性が多いのも頷ける。そこらの女性よりもよっぽど女性らしい美しさと可憐さだ。

「衣擦れの音でも聞いてた？」

そう問われて今度こそ赤くなった。聞こえていたのは事実だ。回顧といえば聞え良い己の行動も夢想といわれればこの状況では卑猥な気もする。誰もいない廊下に弁解する手立てもなく、いやいたところで客観視される己の姿はディディカが感じるよりもよっぽど怪しかったかもしれないと思考を修正する。

そんなことをつらつらと自己弁解の名の下に思考し言い訳も出来ず赤面のまま固まるリオードにディディカの言葉がさらに投下される。

「遠慮することないよ、君なら中に入って鑑賞してもらっていても構わないから」

「おまっ……変わったかと思ったが変わらないな」

それこそ猛反発する勢いでいたリオードは己の友人の口の良く回る事を思い出し、今度こそ口を噤む。いや、話題を逸らす。

「ん？」

「何でもない」

逸らした会話は聞き漏らされた。

「――――人はそう簡単には変わらないと、僕は思うけどね」

（……聞こえてるんじゃないか）

2．4　月日の見た流れ

「あ……」

「ディディカ？」

それはあまりにも唐突だった。

胸を襲う郷愁、二度と戻らない日々への哀切。

透明なガラス窓には丁寧に整えられ完璧な様式美を再現している青い敷地が映っていた。

芽吹き始めの緑が青々とし、雲の通り過ぎる光景を頭上に、燦々と降り注ぐ日光が降り注がれる中、風の温もりに身を預けのびのびと生命を実感している。

大きく切り取られた窓からそんな光景が、眩い光がすべてを清浄化するように洪水のような勢いで差し込んでいたから、……だから思ってしまったのだ。

（――季節が巡る）

「……もう、二年か」

風の囁きが以前、ディディカに心を通わせて教えてくれた。
世界中を旅して回る風は耳がどこにでもある。危険なことやディディカに関することなどは前もって友人のディディカには教えてくれる。――実際、ディディカは魔術を使用することは出来なかったが、風の精霊に魔力を与えて会話することはできたし、魔力を対価に情報を得ることも出来た。
けれど、城の中に止まっている限り、外の情報など大した意味を持ち得なかったし、エレナの事を知ろうと思うのに精霊の力を借りて嗅ぎ回るというのも嫌な話だ。

精霊たちの助言を聞く程度にしか知ろうとは思わなかった世界。あの日から飛び込んだ。
何も知らないまま、我武者羅に走って、ここまで来た。そうして……漸く安定を見せた今、二年が過ぎていた。

「ああ、俺たちが会って、二年」

僕が動き出したあの日から、既に二年が経った。

東と西の境、西の森にあった過去の遺物がその日、燃えた。染まりきらない空をそこだけ赤く色づけて、劫火の炎が立ち上る。その炎が全てを変えた。“あの日”も自らの身に炎がまとわりついて仕方なかった。燃える屋敷。熱くて息が苦しかった。
火の手が上がった。屋敷の者たちはどこか探して、彼女を探して――ようやく見つけた大広間で彼女は――

「……二年の間にすっかり遠慮は抜けたな」

「そう？」

過去に囚われたままの意識が熱いと急きたてる。でもそれは幻痛なのだ。

現実は、リオードと、陽だまりの庭木を見ながら会話をしている。ディディカの身に起こったものではない。痛みなど、身体が覚えてるはずもない。

二年前の炎はディディカに従い、牙を向いて焼いた身はレギナのもの。

それに――焼き焦げる前にレギナは殺され、供物にされた。炎に痛みを感じるよりずっと前に死んでいる。痛みは長引かず、一息で意識を刈り取られた。深々と刺さったナイフの痛み、抉られた衝撃。そんなものを覚えているに過ぎない。

彼女の、最後の表情さえ、見えなかった。

彼女は笑っていただろうか。これから己が身に起こることに幸福を感じて。

それとも少しは哀しんだり罪悪感を覚えてくれただろうか。人を、見知った人物を殺すという事に。

「昨日なんていきなり扉の前に出現して来やがって。あ、いや前と同じか」

「お詫びをしたじゃない。リオードが断った癖に」

「あれは断じてお詫びじゃない！……お前、実は俺をからかって遊んでるだけだろう」

「バレた？」

「ったくお前は！」

（……友人とは、思われていなかっただろう）

そうでなければ、あの日、レギナは殺されなかった。

2．5　五つ柱と無自覚

友人。
ディディカには友人という存在が理解できない。誰かに友だと言われたことはない。

エレナとは偽りの関係だった。
表面上だけの、互いに何も知らないでいることを条件とした、張りぼての友情。

リオードはどうだろうか。
彼は領主で、早くから“大人”を目指していた。虚勢、見栄、矜持、誇り、立場。いろんなものに絡められている。
いや、友という存在を作るには障害が多すぎる身の上だ。彼にとっての“友人”とは己が利益となる人物のことでなければならない。自らの利益を第一に考える事が彼の役目だ。
――ディディカもまた、同じ。
二人は互いの立場を鑑みて、礼節を持ちつつ行動している。それは本当の“友”と呼ぶには余所余所しく、他人行儀で、上辺だけの関係しか築けない。

「でも、昨日は僕の不注意だった。伝令を飛ばせばよかったね」

地の王の固有属性に“空間”というものがある。

通常、魔法も魔術もそれぞれ万物の基本である五つ属性に力を成し、神や王はその属性ごとに存在している。
すべての破壊に通じる火、全てを識る地、すべてを押し戻す水、全てを聞く風、そして無。他に光と闇という属性もあるが、これは存在があるというだけで名前だけのものだ。

この中の無とは言葉の通り無。つまり、魔法も魔術も形を成さない。それが無属性。すべての根源に反する、とも言える。
魔術と魔法のぶつかり合いでできるカオス領域はいわば無属性の地の出現と同じ意味を持ちえる。奇跡の生まれない場所、誰もが無力ならざるを得ない永遠の地。

全ては五つ属性に帰依し、万物の殆どが四つに分かれてゆく。

しかし、世の中には明確にどの属性、と分けにくいものが存在する。
例えば時間。例えば空間。例えば天。例えば底。
それらは付加属性と呼ばれ、属性がそれぞれ持つ固有の力として分断されていく。
空間は遍く大地を統べる“地”の属性、時間は遍く世界に存在する“風”の属性、天は空気の支配権を持つ“火”の属性、底は脈々と続いてゆく流れを示す“水”の属性。
時を極限まで終わりに向けるのは火属性破壊の力、初源に近づけるのが水の癒やし。繋がるすべての空間に通じるのが地の支配。繋がらないすべての場が風の領域。

それら属性の優劣はない。
だが、人には素質というものが具わっている。元来の性質、血、形成された心の形状。それらは魔に親しまないもの達でさえ持ちうる根。

魔術師も魔法使いもその属性には逆らえない。だから優劣が出る。使えないのではないが、限りなく不可能に近い。

火の属性を根に持つ者ならば火の属性を身につけるのは簡単でも、水の属性を使えるようになるためにはその二倍以上の年月を要する。使えることには使えるが、それでも気質が合わず、使い勝手に不便を感じる。多種多様の属性を極めて利便性を図ろうとしたところで、気質が火であれば、火を使うことが一番気性に合う。

そういうわけだから、魔術師でも何でも、多くのものが一つの属性を極めてゆく。

他に手を出して半端にするよりは己の長所を伸ばす、という事だ。それでも、全属性を極める、という天才も変わり者も出てくる。

そして、全属性を極めたと認められたならば――彼らは“エレメンタル”の称号を受け、その使用者という意味で“エレメンタナー”縮めて“タナー”と呼ばれるようになるのだ。

他者よりも、多大なる努力をした証である。

国として、いや世界中の魔術師魔法使いとして、これほど名誉なことはない。

――ただし、その自覚があるのかないのか、ディディカはその道を目指していた。

五つ柱の神に契約を求めていた。

何せ、彼の復讐の相手はエレナである。異世界からの移住者にして祝福を持つ者、全ての愛される権利を得た“ヒロイン”である。

その魅了の力は遍く、神にも王にも広がる。

2．6　対価、代償、けれど想い

だから、“王”を集める彼女に先立って、対立するように、“神”の力に触れた。

今や、二年前に手に入れた火の魔神とこの春、芽吹いた生命の一つ一つに灯る地の魔神を手に入れた。火と地、そして二つに付属する天と空間もディディカが支配する。属性の使用権限はすべて神に統括されているため、力を司り力の塊となる存在である王も、力を扱う権利を剥離するとそのものの存在を消滅させるに等しい。だからこその神。そして、だからこそ、ディディカは自らを代償に神と契約を交わしてゆく。

「地の属性には手を焼かされてるのか」

気遣いの多く入り混じったリオードの瞳が見つめるのはディディカの腕だった。

その腕が動く姿を一度たりとも彼は見たことがない。二年前、簪を片手に火の神と契約した。その時、肉は剥れて溶け落ち、白い骨が覗いた手指。それはもう二度と元には戻らず、その時からずっと、ディディカは手袋を嵌めて過ごしている。骨のまま、神経も無くなった手は格好だけただ人と同じくしている。そして契約印を刻み込んだ喉は夜になれば熱を発して炎はその身を内側から焼く。掻き毟られた首筋の跡は朝には消えて身体に馴染むが毎夜に訪れる激痛だけは過ぎ去らず、幻痛でもない紛れもない現実だ。

「さすがに、この間の今日だからね」

先日の春一番に合わせて手に入れた地の神。その契約印は胸元に記された。代償は足だ。足の付け根からの痺れは知らせも無く唐突にディディカを痛みの狭間へと突き落とす。
彼の足が？がれる事は無かった。しかしそれと同じ痛みがディディカを襲う。いや、実際には一度？がれたのだ。地の魔神はディディカの足を？取り、再び復元した。それが幾度無く、時と場合も関係なく、繰り返される。

「大丈夫なのか」
再び、気遣いの言葉が繰り返される。そんな言葉に疑り深いと思うと同時、自分がどれだけ無茶をしてきたかを振り返る。無茶、と分かっていて、それでもディディカは無茶をやめない。無茶をしなければ、何も出来ない。力を手に入れるためには努力も時間も必要だが、その時間は限られている。だから無茶でも何でもディディカは無理をする。時間は掛けられない。

「ああ。予定通り――今宵、開いてくれ。“夜会”を」
ディディカはいつも通り、いつも通りの笑顔で頼みごとをした。しかしリオードはそのことに不機嫌になったようだった。眉を寄せ、若い顔に皺を作り出す。けれど、否定的な言葉はディディカの耳には入ってこなかった。代わりに、渋々ながら低い声で返答がある。
「……客は既に入ってきている。もう、昼だからな」

視線をディディカの顔から逸らして、前に向けて。
それがリオードなりの優しさでもあった。ディディカの笑顔は強固な壁だ。障壁だ。無茶をして無理をして、それでも前に進み続けるディディカに笑顔を作る、弱音を見せないという労力をさせてしまった。だから、視線を外し、否定せず、了承と事実だけを話した。

リオードはディディカの友人である。それでも互いに爵位を持ち、立派に一人で立っている。開けっぴろげに何でもかんでも素直になれるわけではない。リオードはディディカのことが好きだし、尊敬もしている。友人と思うし、その好きには恋愛感情だって少しばかり混ざっている。だが、リオードはディディカを切り捨てられる。ディディカもまた、リオードを切り捨てられる。共に、そんなことは出来る限りしたくない、回避したい出来事だとは思っている。

しかし、リオードは領地を、家を、国を捨てることはできない。己の家族、信頼してくれる民、共に笑いあったとも、尊敬する王族。そんな彼らに背を向けてディディカだけを選び取る事はリオードには出来ない。そしてディディカもまた、己の復讐とリオードならば復讐を……エレナを取る。

「あ、あのっ！！」

全身に痺れが走った。

電気でも流されたように目の前が白く染まる。思考は空白になり、息さえも忘れた。ただ、白の景色でより白く、けれど最も色付いたその存在に一目惚れという言葉だけがぽっかり浮かぶ。

真っ白な存在が唇を動かし冷たくも見える顔に笑顔という表情を浮かべるとそれは温かく柔らかな色に染まった。まるで雪解けに春の予兆が花開く、そんな儚く可憐な笑み。息を浮き返したのは眠りについていた草花でなく、自分だった。

「何か？」

その言葉は氷の戒めから解き放つ魔法の言葉だ。凍てつく氷を溶

かしつくす熱さを胸に含ませる。だからこそ、胸を焦がす思いのままに言葉を紡ぐ。
「名前を……名前をお聞かせ願えませんか、御方」
礼儀も形式も無く、ただ思いをぶつけるがごとくに願う。その存在を知りたい。自分を知ってもらおうなどという考えには及ばない。そこに至る前に麻痺した思考は玩具を強請る子ども揺するほどのものでしかない。常識も身分も考えず、ただ求める。それほどに、止められない想いがそこにあった。

シュロム伯爵。それを父から受け継いで何十年、ただ平穏なだけの領地に心は乾燥して行くばかり、妻も子もいてもシュロムに何かを与えた事はない。家庭で心が休まるなど、そんなものは感じることさえない。所詮は家同士の結びつき、互いに興味を持たず、一体いつ以来顔をあわせていないかも分からないような生活。ただ仕事をこなす。それもたいていが書類処理。心が震えることは日々の生活にない。
（ああ、しかし……）
今日この日、この場に居合わせたことに心からの感謝を。
ザハルト公爵の次を担うリオード・ザハルト。彼は数年前に成人を向かえこの西領を治める若き領主として社交の場にも姿を現すようになった。そんな彼の開く“夜会”は一部で人気があった。ちょうど二年ほど前から始まったその夜会に今回、シュロムは初めて呼ばれた。そこで見えた女神。……いや、男性なのか。
その服装は至って平凡。贅の限りをつくされたと思える過剰なほどの装飾で飾り付けられた貴族ではない。簡素で質素よりもただ疲弊ばかりを感じさせる平民の服でもない。落ち着きのある深い色の上着、真新しい白のシャツ。間にはベストでも着込んでいるのか。首元にはタイが巻かれて、一般的な紳士の服装だ。逆に言ってしまえば特徴がない故にどんな身分の者かも外観だけでは分かりえない。それは爵位として決して低くはない立場にいるシュロムでさえも自

ら話しかけられないような存在かもしれない。その神々しい容姿は一度見たら二度と忘れないものだろうがために、過去に公式の場で見えたことがないとわかる。――他国の貴族か、もしくは隠された御子か。

それでも構わなかった。親しくなろうなどとは高望みに過ぎ、ただ人物を知ると言う事だけで充分だった。何の取り得も邁進も持ち得ないシュロムが彼の眼に止まる事はないとわかりきっている。シュロムはその美しさに目を奪われ、後先も考えずに話しかけていた。それだけで充分だ。腐りきった日常の中の、ただ一つ心を潤すことの出来る記憶さえあればいい。その名を知り、口ずさむ事で明確に脳裏に刻まれるだろう、その姿。

（ああ、美しい……）

半ば、思考も型作らないようなシュロムはただ見つめ続ける。

白銀の雪原にも冷たく、青い炎のようにも熱いその姿を目に焼き付ける。

2．7　置き去りにされた恋情

（洗脳、魅了――どちらが正しいかなんて議論を交わす意味はないな）

結果は同じか、とリオードはため息交じりの苦笑を洩らす。この友人の顔立ちの綺麗さに性別さえも確認し忘れてしまうのはほとんど当たり前のようなことだった。

それでも、友人の、しかも男が、同じ男に口説かれている姿、というのは慣れがあってさえ衝撃を誘うものだ。対してディディカは日常茶飯事、と簡単に受け止めてしまっている。今現在もリオードの横で笑顔を見せながら対応している。

「私に尋ねているのかな、それとも彼？」

すぐ横で、見上げる気配がした。それに促されて一歩、前に出た。必然的に、ディディカを守るような位置に立つ。

「シュロム卿。本日はお越しいただきありがとうございました。何か要望があれば屋敷に控えさせている者に申し出てくだされば……」

「いえいえ、何も不満などありませんよ。ただ、少しばかり夜会の始まる前に西の領主と話したいことがあってね、忙しいようなら日を改めよう。そちらのご客人もいることだし」

ちらり、と視線を逸らすシュロムの疑問は確認もするまでもない。

土下座をせんばかりの勢いでやってきたシュロム卿はリオードの主催する夜会の招待客だ。ここは既にプライベートスペースを抜けリオードの執務室に近い回廊なので客人に会うことが不自然だとは思わない。ただ、ここにはディディカもいる。

「……彼は、私の友人です」

あえて、明言しない。名を尋ねて、答える。そのことがどれだけ困難な事か、地位が上がるほどにそう思わざるを得ない。立場と言

うものに囚われては関係性を維持する事も難しくなる。――ディディカ・クロック。
その名は今や有名過ぎた。しかし急成長しすぎた“伯爵”はそれだけに忙しい。一定の範囲でしか動かないということもあって姿を垣間見れるのは稀だ。未だに貴族間ではその姿を知らぬ者も多い。だからこそ、今彼がディディカ・クロックであることを知られるのは不味い。その名を知れば感づく者がいてもおかしくないのだ。
正体不明、謎の麗人――D、リオードの主催する夜会の特別ゲスト。
「――見つけてください」
言い訳も何も出来ないリオードに当然、追求の目は止まらなかった。だからか、ディディカが名乗る代わりに言った。
「明かすことが出来ないから、シュロム卿が見つけてください」
笑顔で、けれど酷く挑発的なことを放つ。

「……っええ！わかりました、必ず探し出して見せましょう、月の御方」
シュロム卿はその言葉だけで取って返した。すぐさま己の従者にでも調べ上げさせようとするだろう。去り際の上気した頬を見なくとも行動は推測できる。だが、証拠がつかめるはずがない。銀髪の美麗は貴族の中に当て嵌まるものなどいないだろう。だが、常識的に考えて、ありえない。ディディカ・クロック伯爵とはこの西領とは遠く離れた南の土地の統治者だ。そこへ行くまでに貴族ならば一ヶ月、旅人ならば強行軍で二週間といった道程が横たわっている。現実的に無理なのだ。
そう、気軽に尋ねてこられる場所ではない。だが、それを可能とさせるのが魔術、いや魔法か。それさえも不便としか言いようがない。転移の術はそれほどの長距離に対応はしておらず、人の魔力はそこまで強くなく、現実性を帯びないことを為しえない。単に、それが出来るのはディディカだからだ。

ただ一人、神の力を操るディディカだからこその御技。一瞬で領地に帰ることの出来るディディカは伯爵がディディカを特定するころには領地で何事もなかったかのように仕事をしているだろう。西領へと出かけた事など誰も知らない。

「酷い奴だな」

シュロムはディディカ・クロック伯爵に会おうとするだろう。その姿は“月の御方”と同じだ。だが、晒される真実は決定的に矛盾する。この場にいるディディカは存在し得ない。

シュロム卿の丸まった背が遠ざかるのをぼんやりと見つめた。

何故、あんなにも必死になれるのだろう。そう、凍りついた思考が停滞寸前のまま考える。シュロム伯爵とは幼い頃から父親に、周囲にそうなるべく教育された。貴族の嗜みとして武にも心得はあったはずだが、どれも凡庸。爵位を譲り受けてからもやる事なすこと凡庸。同じ派閥から妻を娶り、子どももいるが特別仲睦まじくも仮面夫婦でもない。領地政策も他と変わらず、横領というには小者、野心があるというには目的意識も薄い。適度に圧政を敷いて民と貴族の溝を深め、ある程度の民に嫌われ、ある程度の民に好かれる。酷くはない、けれど良くもない領地。人柄も特に目立ったところなく凡庸。趣味趣向があるわけでもない。無味乾燥な人物。

それだったはずなのに、出逢った人物は輝きに満ちた瞳をしていた。いきなり生を取り戻したかのような、生き生きとした表情。言葉には情熱が溢れ、……それが自分の存在だと知る。

皆が、そのような目を向けた。己の外観に、存在に、惹かれる。そんなことはわかりきっていた。ディディカの容姿は人を惹きつけ、人を輝きに満たす。

――けれど、

「……おあいにく、僕には心に決めた人が居るんでね」

ディディカは自らが生き生きと、輝いているわけではない事を知っている。あるのはほの暗い復讐心のみ。それ以外はなく、また求めようともしていなかった。

「まだ、忘れられないのか？そいつ」

ぽつりと零した本音がリオードに拾われた。けれど、訪ねられた事は的外れとしか言いようがない。そいつ、と表される人物にはまったく心当たりがなかった。

「え？なんのこと」

「今の話だ。心に決めた相手って――テナーだろ」

その言葉にドキ、と胸が不自然な音を立てる。

テナー、聖女、異世界人。その三つの単語を繋ぐ、エレナという存在。ディディカの心に救う闇の核、凍てついた感情が胸に不自然な高鳴りを呼び起こす。

その表情に過ぎ去った感情にリオードに気付かないはずがないのに、笑顔で押し込める。

「――何言ってるのさ。リオードだよ、もちろん」

その言葉に、一瞬リオードの表情が無になる。そして取り戻される平静。

「……冗談がきついぞ、ディディカ」

米神に指を押し当てて揉み解すような仕草に苦笑した。

（ほら、負担になってるじゃないか）

「……変な事考えるなよ」

リオードと適正な距離を測るべきか、と考え始めた思考を鋭い観察眼が見抜いたらしい。やけに警告じみた言葉は心配から来るものだと知っている。お人よしなのだ、昔も今も。

「別に。ちゃんとリオードのことは好きだよ」

だから甘えてる。弱い部分を見られたから、すべて晒してしまえるこの距離にいる。

「ただ、ね……僕は正直、今更恋をしようとは考えていない」
復讐以外の感情に振り回されたくない。見据えたいのだ。それ以外の何かでぶれない様に生きなければいけない。……本当なら、友情でさえも断ち切ってしまいたい。
柵は人を弱くする。同時に、柵があるから、絆があるからこそ人は強くなれる。
魔族は柵に囚われない。あるのは強さのみ。
人と魔族のハーフであるディディカにはそれがわからない。どちらが正しいのか、どちらも間違っているのか。――自分は何を求めるのか。

「復讐に生きるってやつか」
(目の前、ちゃんと見えてんのか)
心配になる。過保護なぐらいだと、自覚しているリオードは、だから自分を抑制する。
ディディカの本質は何にも囚われない。風の属性がそれを示している。飛ぶための翼が彼にはある。だからリオードの存在はただのお節介でしかない。
ただ、羽を休める為の木が、己であればいいとは思う。それが、友人なのだと思う。
木を折るかもしれない、と遠慮して飛び続ける鳥がいないのと同じように、ディディカも自分のことだけを考えてればいいのだ。
柵に、復讐に囚われて生きるのは、らしくない。さっさと断ち切ってしまえ、そう思うのにリオードの身体はいつまでも地に付いたまま、見上げるしか出来ない。
「21歳で僕の性別は決まる。それまでにきちんと色々な事を終わらせないといけない。それまでに、僕がどういう風に生きるのかを決めなきゃいけない」
何にも囚われず、流れてゆくのが旅人だ。ディディカとレギナは

やはり、同一人物なのだ。――留めておくすべはない。
「現在を生きるために、“過去”を終わらせたい」
眼差しは強いのに、底冷えするような心地になる。
復讐の冷たい炎。けれど、リオードが感じるのはそれよりも更に深いところにある、虚無。ディディカでさえも気付かない、ぽっかりと空いた心の穴。
何処とも知れぬ闇と繋がっているようなそれをリオードは感じ取っていた。
「あっそ。好きにやってろよ」
結局、ほっぽ向くようにしてしか、二人はこの話を終わらせる事が出来ない。
二年間、幾度も繰り返し行われた、この会話の結論。ディディカの生きる理由、存在価値とも言えるようなそれは変わるはずもなく、リオードは納得できないまま、月日だけが過ぎてゆく。周囲は目まぐるしく変わって行き、二人もまた変わってきたはずなのに、そこだけが変わらない。

「今宵のゲームはDの専売特許、チェスゲームだ」
そう、得意げにディディカは言った。

2．8　闇の会合

暗い闇がひしめいていた。
そこに人々はいる。広間だ。炎が槍のような細く鋭い金の彫刻に揺れていた。点々と辺りを照らすが全体をさらけ出すには闇が深すぎた。しかし人々はそれを気にした素振りも見せない。暗い部屋でなお、それぞれの顔を隠すように仮面で半分以上を覆っていた。
楽しげに交わされる会話は不気味な雰囲気を纏う。
背後に蠢く闇は深く、深く、壁の際を見せず、途切れることはない。入口は即ち出口だ。彼らがここにいるということは入ってきた場所が、どこかに繋がっている道があるはずなのだ。だが、丸く囲むように燭台がある以外は何も照らし出さない。道は闇の中に紛れ、呑み込まれている。堅く閉ざされている。

主催者であるはずのリオードはそれを不思議に眺め、そして不気味に思う。
（ここは何という場所なのだろう）

闇に潜む化物どもの巣穴。それこそが相応しい。
薄暗い場所で、しかし住人はそのことにも気づかず、ただ暗い世界を己の世界とだけ知っている。それ以外の世界に己の居場所はない。他の場所では己もまた他の人間だ。
リオードは隣に佇む、優しげな顔を浮かべる美しい青年を見た。
そして知る。――これは化物だ。

空恐ろしいほどの恐怖を身体の心にまで感じてしまい、硬直した。

瞳を合わせたわけでもないのに己の全てを奪われたと思った。

＊＊＊＊＊

城主であるリオードの寝室、そこに彼は見慣れぬものを見た。
白いベッドは装飾が慎ましやかながら上質に作られており、それは貴族という階級に慣れた者たちには到底理解できないようなものであった。リオードが数多くの者達から変わり者扱いされる所以でもあったが、問題はそこではない。
優雅に寝転ぶその姿を見て、――盛大な溜息をつきたくなった。

息を呑む美しさにリオードの身体は硬直と体温上昇を訴えていたが、それでも溜息と諦念が先走る。

「何やってんだ、お前」

さきほどは恐怖すら感じた相手が無防備にリオードの前で裸体を晒している。そのことに、自分に、滑稽を覚えた。同い年の青年、それも立場が上のものに対してそれはかなり不敬な感情ではあったけれども。

「いや、お礼をと思ってね」

ベッドはシーツを乱され、本を散乱し、蹂躙されていた。
ベッドに横になることもできず、本から目を離さない青年を前にリオードは服を投げかけ部屋を出ようとするが、短い呼び止めに足を止めた。

「話がしたかったんだ、リオード。友人になりたくてね」

まったく真剣味の感じられない声音で、けれどようやっとリオードへと向けた視線で青年、ディディカは言った。だから、リオードも振り返る。二人の視線は交錯したが、ディディカは合いも変わらず無表情で、けれど楽しげな色を瞳に灯していた。だから、リオードも言ってやったのだ。「……まず、服を着ろ」

2．9　友人という関係の始まり

青年はつい先日、リオードの領内に無断侵入し、捕まえた重病者だった。朝に様子を見たときも深く眠り、意識を沈めていた。それが、

（なんで）

「なんで病人がそんな格好で何してる」

先ほどの夜会。

それはもともとリオードが開催するはずだった。その予定があった。だから目の前の青年がうわごとの様に放った頼みをついでに聞き届けた。

夜会に参加させろ、それは十分無理な話だったがそれを止めることはできそうにないと判断してのものだ。虚ろな意識で勝手にうろつきまわられるよりはよっぽど、監視下という正式な参加のほうが危なげがない。

高熱で浮されていた時でさえあれほど明確に強い意志を持って行動していたならば、多少具合が悪いとて熱が微熱へと下がり回復した今ならば強引にでも青年は動く。

そう、判断してのことだった。

「病人じゃないさ。そもそも、今さっきだって立派に務めただろう

？」
務めた。そうだ、リオードが開いた初めての夜会は大成功に終わった。夜会のやの字も知らないような彼が、そのような結果を得たのは目の前の青年の功績あってのものだ。疑うべくもなく、彼――“D”の存在のおかげである。

「礼、といったじゃないか」

「ふざけてる」

礼を言うのはリオードの方だというのに青年の態度に腹が立って仕方ない。

“D”と名乗った青年はゲームをした。招待客と賭け勝負をし、そして勝った。勝ち続けた。ゲームの内容は多岐に渡り、ポーカー、チェス、じゃんけん、クイズ、ロシアンルーレット、……無敗。賭けられるチップは膨大に膨れ上がり、完全な賭博上としてそこは嵐に吹き荒れた。青年が賭けるものはただ一つ、己の身だった。
病人で、熱に浮かされているはずなのに頭脳は冴え冴えと、理路整然と物事を為す。

「ふざけてる」
もう一度、リオードは言った。

「ふざけてはいないさ。ほら、――」
「――――ッ！！」
無理矢理向けさせられた正面、青年は服を着ていなかった。
「僕は人と淫魔のハーフ。成人までは雌雄を恣意的に操作できる」
どうだろう？と微笑んで見せるその顔に、浮かぶ艶。
その肢体はなだらかなものから起伏のあるものへと変化し、丸みを帯びて異性の関心を呼ぶ。熟れきった女性の魅惑的肢体。

だが、リオードはそれを見て、動揺のまま叫ぶ。

「一回で覚えろ。俺は服を着ろと言ったんだッ！」

部屋に飾られた花瓶を投げつけようと殺意に近いものを覚えた。

2．10　Dの賭け

（――そんな初対面を迎えておいて今では“友人”か）
思考が今に戻り、あの時と同じように横へと視線を向けた。
「ん？どうしたんだ、リオード」
あの時と同じ、リオードの主催する夜会が今、行われている。あの時と似て――けれど確実に歩みを進めている。けれど、不安は増長するばかりだった。

「……いや、自分でもわけがわからない」
形にできない思い。きっと、形になる頃に気付いてももう遅い。それでも、形にする事を躊躇われる。――それこそが不安だった。
そんなリオードの不安を読み取っているのかどうか、ディディカはくすり、と小さく笑ってみせる。瞳には不安など吹き飛んでしまいそうな潔さがある。彼は「まるで」と前置きしてから言う。
「恋の理由でも探してるような台詞を吐くんだね」

すぐには反応できなかった。

「恋！？冗談はよしてくれっ」
正気に立ち直ってすぐ反論するリオードにディディカは何も言わず、ただ笑うだけだった。そして何を気にする風もなく、一歩前に出た。
「――卿。その情報、買いましょう」
“D”として。

「い、いえいえ……そのような、売るほどのものでは――」
「二時間」
値段を吊り上げるつもりか、と言い渋る男の様子に知る。Dは自ら条件を提示した。己の身を対価にしたDのやりかただ。ゲームの賭けはただ己が勝てばいい。だが、これは普通の売買だ。相手の情報を確実に買えるが、己も確実に売ることになる。
「私の時間をあげましょう」
それでも猶、Dは言った。ざわつく周囲の反応がある中、更に言う。
「そ、そんな……とんでもない。そのようなつもりは――！！」
「二時間半でどうでしょう？」
時間を売る、ディディカの伯爵としての執務時間を減らすことでもあり、また、時間を縛られるという事は逃げられないということでもある。何をされても、逃げられない。抵抗はしうる。だが、逃げられない中、制限時間のみが希望のまま、抗えるか。
ディディカは魔法や魔術がなければ何も出来ない。人の身は非力なのだと、最近自覚が出てきた。神との契約を得るため、身を代償にする行為。それは痛い。辛い。
なにより、恐怖だ。
「――わかりました、その時間で……」
その喉を焼く。その足を折る。容易い、動作一つで。
何をされるのだろう。何をするつもりだろう。ディディカという人物は美しいだけの存在ではない。地位がある。利用価値がある。

「待ちたまえ」
共にざわめく周囲の声が一瞬遠のいて、一層大きさを増す。
「その情報は一時間で私が売ろう」

2．11　絆の風化

「……なぜ、時間をお買いに？父上」
最初にじょうほうを散らつかせた客人には丁寧に払い下げし、それでも猶食い下がってきた折にはDの専売特許、ゲームで情報と身を賭けた。結果的にD――ディディカは勝ち、客人には引き下がってもらって改めてこの人物との商談を進めた。
「――改めて話す時間が欲しかった、というだけのことだ」
「話すことなど」
「お前の成人式典のことだ」
商談の最中に割り入っただけのことはあり、既にディディカは対価を得、それに満足している。それは魔領と人の地とを隔てる空白地帯――広大なカオス領域の砂漠帯にある広い泉のことだった。そこにはディディカも水の神の居所として考えていたところでもある。
情報の価値は高い。対して、ディディカが払うのは一時間。安い。内容は対談の時間らしいことはその態度からわかっていた。
「お答えするつもりはありませんよ、公爵」
この世界は人の地と魔領とで分かれている。どちらも統一国家だ。魔領が四公が納める地と魔王の居城で成り立つのに対し、こちらは二代公爵含む十貴族が統治する。他の都市にも大きい場所はあるが、それは貴族以下の平民から統治される属地で構成される。ディディカはその中で小さな港町を貸与されたがそれはその他多く、の土地の一つでしかない。伯爵の位についたところで、ディディカは平民上がり。孤児、出生も分からない。そうなっている。
「いつまでも子供でいられると思うなよ」
「ウェルス卿」

強く、名を呼ぶ。だがディディカは口に出来なかった。――“私はあなたの子ではない”――そのたった一言を。

「私は、公爵と何の関係もございません」

硬い表情でディディカはそれだけを紡ぐ。

目上の者への物言いとしては適切ではない。そんなことは分かりきっていた。ウェルスの主張を受け入れたとしてもこの言葉は寛容にはできない。頭では理解している。けれど、今のディディカにはそれ以外の何の答えも出てきそうには無かった。

そんなディディカの様子をどう見たのか、ウェルスはただ嘆息する。

「……私も老い先短い。後継者がほしくなったのだよ」

疲れたような声音は以前直接会った時とは確かに違う。二年前、初めてリオードが夜会を開いた折、この男は同じようにディディカの前に現れ、決別の言葉を放ったのだ。「認められぬ」――その言葉はバターに切り込まれたナイフのようにディディカの心を裂いた。

幼き日より孤独を内に抱え込んだ彼はエレナと出会うことで世の中の理不尽を受け入れた気でいた。自らに受ける処遇はその出自のためと心に自制を聞かせてきた。だがあの日、あの二年前、全てを知った。――ディディカの心はエレナによって平穏を保たれていたのが、あの日の彼女に粉々に砕かれた。燃える塔が溶け出すのと同じく、ディディカの世界を憎む心も激しく熱を発していた。熱く、暗く、重々しい復讐の炎。

それはこの男に会うことで正確に世界へと向けられたように思う。

「養子、ですか」

実に感慨の無い声でディディカは言った。そこに込められた感情も意味もない。

傷ついた心と体を抱えてこの場にいた二年前なら欲した言葉だった。家族という絆がもう一度この世界へと彼の心を繋ぎとめたかも

しれない。けれど、その繋がりは目前で断ち切られた。幽閉により緩んでいた家族の糸はあの日にぷっつりと途切れ、今はもう、跡形も無く風化してしまっている。

「いいや、実子だよ」

茶番だった。こんなやり取りは時間の無駄でしかない。瞬時に脳がたたき出す答え――不要。ただ消耗して行くばかりの時間にディディカは手慰みの仕事を始める。

無造作に置かれていた書類を手に取り、目を走らせる。

こんな態度は勿論、誰に対しても失礼だ。だが叱責にも値しない行動らしい。ウェルスはその行動を具に見るのみで、注意も注視もせず、ただ黙々と座っている。これ以上、何かを切り出すこともなく、ただディディカの返答を待つような姿勢を見せている。

だが、実子だからどうだというのか。血の繋がりを認められたところで、“今更”だ。ディディカは既にそれを必要としていない。目的はただ一つ、エレナ。

エレナを討つ――そのためにはそれなりの地位があった方が動きやすい。だが、その地位もディディカは己の力のみで手に入れた。それ以上の価値は地位になく、ただ家族としての愛情を求めた時期も過ぎ去った。仮にそれを求めたとして、この男はディディカに与える事も出来ない。愛、家族愛、親愛――それは執着だった。この世への、この世界への、ディディカとして生きるために必要なもの。

だが、今のディディカは……

「パーティーには参加させてもらいます。しかし、この論は本日に於いては平行線をたどるしかないようですね。――また、日を改めて」

冷たく言い放ったディディカにウェルスは立ち上がった。

「決断は意志に関係なく迫る」

余計な一言を残していったウェルスに、頭に入らない書類を放っ

て窓の外を見た。枠に縁取られた窓は光を浴びて室内に格子状に影を伸ばす。それが何処か牢獄のようにも感じて、心休まるはずのリオードの家が今夜ばかりはディディカの幼い頃の記憶を刺激する。

「……わかっていますよ、父上」

自分が一番痛感している。時間はそう、多く残されていない。

ディディカは立ち上がった。

2．12　名の無証明

「――リオード。僕の話を、聞いてくれるかい」
夜会の終わった夜に突然訪れた友人はペンを走らせるリオードに関係なく執務室を一人優雅なお茶会にしたあげく、愚痴る。そうかと思えば、さも憂鬱そうに昔語りと称した“夢”を話し始めたのだ。

「……あいかわらず、名前。わかんないのか」
ひとまずペンを置く、ということをやっていたらどれだけの時間拘束されるかわからないのはこれまでの経験からわかっていた。だからこそリオードはひたすらカリカリとペンを白い紙を文字で埋め尽くすのに思考を傾けながらディディカの話にも頷きかける。
ディディカもそれでいいと思っているようで、文句を言う事もなく、話の語り口を切り替える事もなく当然の如く対応する。
「……そうだね。記憶は思い出すのに、それだけがわからないなんて、記憶が欠落しているというより、封印されているか、」
「存在しないものとなったか、か。そんなことがありえるのか？」
ただ、今夜だけは二人の様子が違っていた。
リオードは執務をしつつ、先ほどの夜会での出来事――ディディカを訪ねてきた“父親”の存在に動揺し、どのような会話が為されたのかと心配をし、ディディカはリオードが発した一言に酷く動揺していた。ディディカの言葉を引き継ぐように放った言葉はディディカの認めたくない、しかし否定も出来ない言葉だった。

彼女の存在がなくなった。

（それが嬉しいものかっ！）
いいや、それどころか存在しなくなった彼女を覚え、彼女に影響され続けた“レギナ”とはどうなったのか。その存在さえも“なかったもの”となってしまったのか。

「そんな……僕には！――っ何もなかった事にするなんてできない」
それは恨み言であり、願いだ。最初から何もなければよかった、それならばこのようなことをする必要もなかった。あるいは、何かが違っていたならば。
しかし、そんなＩＦを考えるなど、おこがましい。現実に起こっていないことを想起して現在に烙印を押す。それは“ディディカ”を否定するだけでなく、リオードの友情までも否定する行為だ。
「ディディカ……」
心配げに寄せられた眉根が切ない。
もし、エレナがいなければ。あの世界は、この世界はどうなっていただろう。
もし、エレナとレギナが出会わなければ、この世界は、ディディカはどうなっていただろう。
ディディカにはわからない。あの二年前の日、“レギナ”を思い出してから、ディディカは自分というのが分からない。ディディカという存在は何なのか。
もしかしたらディディカとは単なるレギナの記憶保持者で、魂が同じだけの、全く別人であったかもしれない。もしかしたらディディカはレギナとして意志を持ち生まれ出た後に記憶が失われていたのかもしれない。――今のディディカにそれを知る術はない。
ただ、エレナの存在を排除しない限りはディディカはその影に影響され続けるということだけがわかっている。だから戦うのだ。だから決めたのだ、エレナを討つ、と。
「前から、不思議だったんだが、ならなんでお前は男なんだ？」

「え？」
唐突な質問に思考が霧散する。なんと言われたかも理解しないまま聞き返す。
「いや、ほら。淫魔の特性があるだろ。女としての記憶があるし、そのことも忘れられないならなんで女にならないのかって思って」
ああ、そのことか。とディディカは感慨を受けるでもなく答える。
「――単純に、力があるからだよ。誰かに襲われてもまったく抵抗の出来ないようなひ弱な身体で居る事に抵抗があるというのかな」
「お、おそわれっ！？」
リオードは顔を赤くしたり青くしたりと表情の変化に忙しい。だが当人のディディカは実にノンビリとしたものだ。
「うん。以前が不意打ちで刺されて死んだっていうのがやっぱりトラウマというか」
（ああ、そっちか……）
落ち着くために口元にコップをあて、傾ける。じんわり、アルコールがリオードの喉の渇きを潤す。聞く所によると、ディディカの持つ前世の記憶――レギナという人物はそれなりに壮絶な過去を持っていた。両親はなく、何かに追われる様に移動し続ける日々。とうとう力尽きた祖母はレギナを置いて一人逝く。その後のレギナは引き取られた孤児院で糊口をやり過ごすため様々なことに着手するが親友――××が貴族に引き取られる段になって館へと召し上げられた。そこで受けたのは身分差とイジメの奨励だった。しかもその人生の終わりは短く、嫉妬に駆られた親友××に刺し殺された挙句、屋敷ごと炎に炙られるという非業の死を遂げているのだ。トラウマにもなろう。己を殺した女が平然と自分の恋人として横にいたのだ。
「夜を共に過ごしてくれる人が居るならば女の身でいてもいいんだけどさ」
「ぶっ！！」

とんでもない言葉と共に流し目で見られてリオードは噴出す。
「うっわ、汚。何やってるんだよ、大丈夫？」
言葉は辛らつながらも首を傾げて心配する様子はなんとも色っぽく、美しい。
けれど、それに釣られるリオードではない。でなければ見てるだけで人の心をかき乱すような神の体現と等しき美貌を持ちえるディディカの友人などやってられない。
「リオードは初心だよね。僕が何とかしてあげなきゃって思いに駆られる前に何とかしといた方がいいよ」
「……お前は常識ないくせに結構はっちゃけてるよな」
溜め息をつきたい気持ちでそれだけを零した。社会に出て二年、常識を知って二年。それより前は書物で情報を知りえた。風の属性との親和性が高いために風の精霊や小鳥たちの話を聞き知る事もあったがごくわずかばかりの恩恵であった。基本的にディディカは様々な事に疎く、表面的にしか知りえない。
恋愛事情に関しても、妖しい知識にしても、表面的で知識的な情報しか知らない。だからか、臆面もなくディディカは言葉を口に出す。
「――ん……そうだね、あんまり気にしてない。淫魔は性に奔放なところがあるというからそれかもしれないね。もしくは、以前が女だったからこそあんまり壁を感じてないのかな」
「俺はお前が心配になるよ……」
まったくわかっていないディディカにリオードは頭が痛くなるようだった。
そんな様子をディディカもまた苦笑して見ている。
「リオード」
それは何かを言おうとして、何もいえなかった、その残滓だ。

苦笑から、仮面のような微笑へと変わるのはそう、難しい事ではない。

「もう寝るよ、おやすみ」

ディディカは何も言うことなく、それ以上悩む事さえなく、闇を振り払う強さで暫しの別れを告げた。

１７という年齢は人間ではまだ成人と呼べるものではない。だが、逆にこの位の時期から２１歳の成人までが結婚の適齢期である。しかし彼は社交シーズンに乗り遅れた。めぼしい相手方もなく毎日が鬱々と変わらない。日中でも薄暗い塔の中に一人留まっている。――正確には去年の社交シーズンだけでなく、過去一度も人々と知り合う機会が芽生えていない。そしてこれからも変わることなく、誰とも面会かなわず静かな城に過ごすのだろう。

幼い頃からの賢すぎる頭脳は一人の寂しさを感じても恨みはない。怒りよりも先に諦念が浮かぶ。これが幸せなのだと妥協しているのかもしれない。生きて、何も知らないままに死んでいく。ここは墓場だ。生まれた時から青年は墓場にいる。

（だが、運命は変わった。あの日、あの時から）

あの日の孤独な青年はもう何処にもいない。ここにいるのは、――ただ破壊と、復讐を願う復活者（アン・リビデッド）。自らを堕落した女を追いかける亡霊。それが、ディディカ・クロック。元、異世界の旅人レギナ・ウルファルド。

「恋なんて……できるわけがない」

夜の隙間に呟いた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5088v/

女王の涙

2011年12月1日01時50分発行